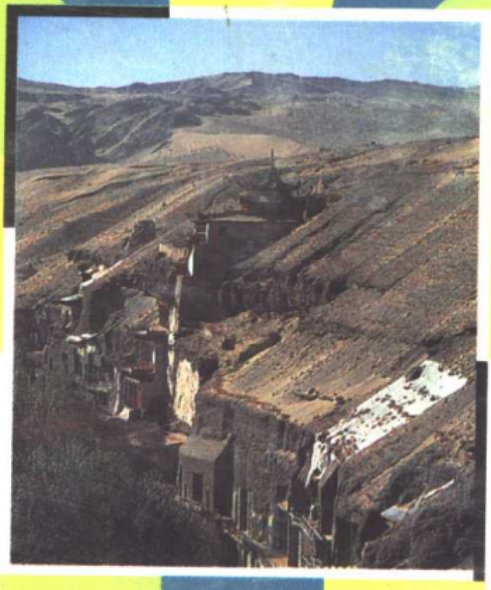
観光都市の伝説

敦　煌

シリーズ読物



H

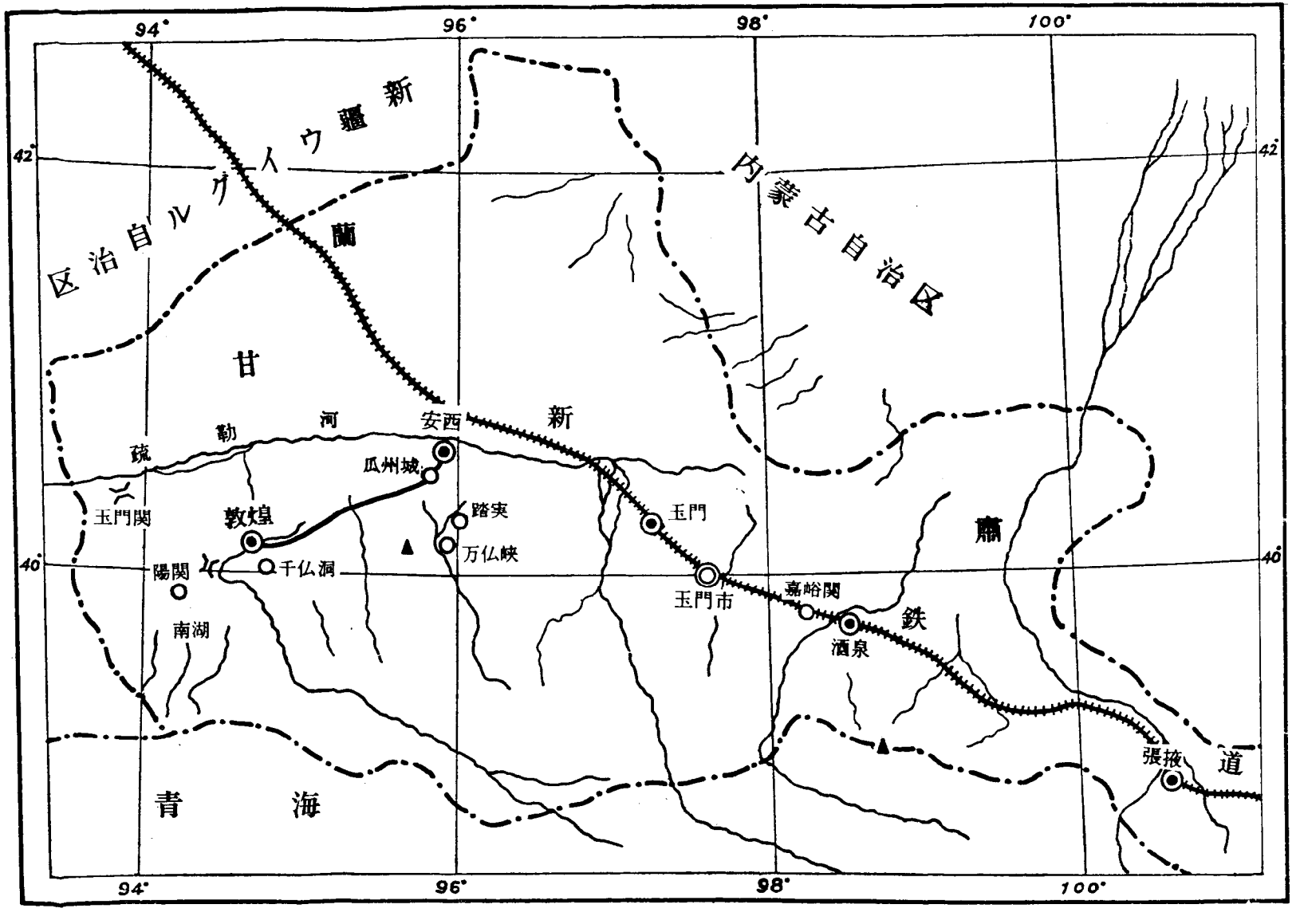
観光都市の伝説
——敦　煌

外文出版社
北京

日本語版責任編集　邵東
表紙デザイン　朱振安
さし絵　張大羽

観光都市の伝説——敦煌
1994年初版発行
編　者——兆　耳
訳　者——韓飛鳳
出版者——外　文　出　版　社
（北京西城区百万荘路24号）
発行者——中国国際図書貿易総公司
（北京P.O.Box 399）
印刷者——外　文　印　刷　廠
ＩＳＢＮ　7-119-01453-6／Z・519（外）
17-J-2707P
（日）01200

敦煌位置図


94°
96°
98°
100°
42°
40°
新疆ウイグル自治区
内蒙古自治区
甘
蘭
新
安西
瓜州城
疏
勒
河
玉門関
敦煌
踏実
万仏峡
千仏洞
陽関
南湖
玉門
玉門市
嘉峪関
酒泉
鉄
張掖
道
肅
青
海

シリーズ読物

『観光都市の伝説』

① 北　京

② 南　京

③ 揚　州

④ 承　徳

⑤ 蘇　州

⑥ 広　州

⑦ 桂　林

⑧ 敦　煌

⑨ 大　連

⑩ 杭　州

⑪ 洛　陽

⑫ 西　安

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

敦煌は中国の西部にある極めて魅惑的な観光都市の一つ。シルク・ロードの途上にある主な古城で、二千余年の歴史を有している。世界にその名を知られる莫高窟の文物や古跡および鳴沙山、月牙泉などの絶景があるほか、敦煌古城に関する数々の民間伝説もある。それらの伝説はいずれも地元の住民の奇異な想像力と創作能力をあらわしており、ゆたかな地方色がどの行間にもにじみ出ている。読者の敦煌の歴史、文化、風土、人情を知るうえで役立つであろう。

目次

はじめに／三
瓜州の伝説／七
千仏洞の由来／一四
蓮花女／一九
敬徳将軍の「乗馬用台石」／二七
五色光井戸／三二
皇姑塔／三九
奇妙な透明碑／四三
吸風洞／五〇
避塵珠／五六
東千仏洞の伝説／五九
三危山の伝説／六三
青竜と黄竜／六六
三青鳥／六八
観音井戸／七三
拝借された月／七五
金メロンが砂風防止に一役／八〇
鳴砂山でドラと太鼓が冤訴／九〇
天馬を捉える／九四
五色砂／九八
七星草／一〇一
鉄背魚／一〇八

骨董砂洲／一二〇
黄水堤防／一二三
寿昌の駿馬／一三二
紅山峡谷／一三六
陽関硯／一四一
金鶏の道案内／一四六
玉門関／一五三
香炉墩／一五七
神遊城／一六二
禁断の蚕・桑、于闐国に伝わる／一六六
橋弯行宮／一七一
「甘水井戸」／一七五
拱星墩／一八五
新店子の塩池／一八九
白ラクダ／一九五
玉女河／二〇一
白馬塔／二〇八
海馬泉／二一二
象牙仏／二一五
定風碑／二一八
双塔／二二〇
窟窿山／二二四
貳師泉／二二六
木鳶を作った魯班／二二九
魯班窓／二三五
張芝が墨を洗った池／二三八
李広杏／二四五

はじめに

敦煌は甘粛省の西部に位置し、甘粛省の北部と西部は新疆のウイグル族自治区と境界を接している。大昔からここ一帯には人が住んでいた。後になって、羌戎人、月氏人と匈奴人があいついでこの地方を占拠した。それらの民族はいずれも遊牧民族であった。その後漢の武帝が派兵し河西回廊で匈奴を打ち敗って以降、漢族が中原からここに移住してきて開墾した。歴史の記載によると、敦煌の古城は漢の武帝の元鼎六年（紀元前一一四年）に建造されたものであり、武帝はここに敦煌郡を設置したが、これは河西に設立された四郡（武威、張掖、酒泉、敦煌）のうちの一郡で、その下に六県が置かれていた。城は鳴砂山の麓にあり、付近は西瓜の名産地だったので、古代から敦煌は一名、沙州城または瓜州城とも呼ばれた。

敦煌はシルクロードの途上にある重要な古城である。シルクロードの新疆境内にある三本のコースはいずれも敦煌を出発点としたものである。キャラバンが西へ行こうと、また東から来ようといずれもここを通過しなければならなかった。したがって、ここは中国と西方との貿易、文化交流の重要都市であった。

ここの山河湖沼はゆたかで珍しい古代文化の遺跡を数多く保存している。敦煌の東南方に雄大な

祁連山があり、西は広大ではてしないタクラマカン大砂漠がある。東には三危山が屏風のように聳え、北には白山がえんえんと走り、美麗で豊饒な盆地をなしている。敦煌地方の大部分は、七月から八月までの間の気温はやや高めだが、冬季は寒い。一年の降雨量はひじょうに少なく、温帯の乾燥気候である。

敦煌が誇りとしているのは莫高窟である。莫高窟は別名、千仏洞とも呼ばれている。敦煌城の東南二十キロのところにあり、三危山と鳴砂山の間にはさまれている。洞窟は鳴砂山東麓にある断崖の上に掘さくされた上下五層の石窟である。史料によれば、莫高窟の第一窟は前秦の建元二年（紀元三六六年）に掘さくされ、唐代武則天の時代になると、石窟のなかの仏壇は千以上にも増えた。長年、自然の風化と人為的破壊によって消えなくなったのもあるが、それでも現在なお、北魏、西魏、北周、隋、唐、五代、宋、西夏、元などの各王朝の壁画と塑像のある洞窟が四百九十二もあり、壁画は計四万五千平方メートル以上もある。彩色の塑像は二千四百五十体。石窟の大小は均一ではなく、最小の第三十七窟は頭しか入らないような狭さであるが、最大の第十六窟は面積二百六十八平方メートル、最高の第九十六窟は高さ四十メートルもあって外観はあたかも九階建ての高楼のようにみえる。莫高窟は中国にある現存の石窟のうち最も規模が大きく、かつ内容も一番豊富である。いうなれば古芸術の宝庫であり、また世界現存の仏教芸術の最も雄大な宝庫でもある。莫高窟の各代の壁画は主として勤労人民の漁猟、耕作、建築、輸送、穀物すりひき、米つき、陶器づくりなど

の情景を描いている。このほか、仏教の故事も数多く描写されている。これらの壁画は中国古代の政治、経済、軍事、文化、宗教などの研究に貴重な造型資料を提供している。また仏教の教典を保存している莫高窟第十七窟は清代の光緒二十六年(紀元一九〇〇年)に発見されたものであり、なかには仏典はもちろん文書、織物、刺しゅう、絵画などの文物が五万余点あって、内外の学術界を驚嘆させ、内外の学者からこの上ない注目を浴びた。それからというもの、敦煌の芸術と仏教を研究する学者も年を追って増え、社会科学の分野では「敦煌学」という専門学科さえ形成された。

芸術宝庫の莫高窟以外に、敦煌にはなお唐代の詩人・李白、王維、王之渙(たうしかん)が筆を取って吟詠した陽関、玉門関の詩があるだけでなく、極めて完璧に近い原形を保存している漢時代の長城やのろし台、数多くの漢、唐時代の墳墓があり、また奇異美麗な鳴砂山、月牙泉、懸泉水などの名景もある。

世々代々、ここに居住し生活した人々は、ゆたかで独特の風格をもつすぐれた敦煌芸術を創造したばかりでなく、人を感動させる数々の伝説をも創作したのである。われわれが敦煌の各地で収集した伝説故事は、名勝の古跡についての来歴をユーモラス的な言辞で綴ったのもあれば、善良な庶民の尊い品性を称賛したのもあり、また、貪欲な汚職官僚の醜悪な実体をあばいたもの、悪徳不仁の地方勢力者の卑劣な行為をえぐり出したもの、さらに庶民の自然災害とたたかい、生き抜いて幸福な生活を追求する心情を反映したのもある。これらの伝説故事は奇想天外の想像と濃厚な地方色にあふれ、読者が敦煌の歴史と文化、風土人情を理解するうえでの手助けとなろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

瓜州（かしゅう）の伝説

古代の敦煌は敦煌とは呼ばれなかった。また沙州とも呼ばないで、瓜州と呼んでいた。なぜ瓜州と呼んだのだろう？

伝説によれば、ずっと大昔、西王母（神話の女神。美貌で不死の薬を有していたという）は天上の瑤池（ようち）（神話の中の西王母の住所）ではなく、三危山に住んでいた。

当時の三危山の風光は秀麗で魅惑的だった。高くそびえ立ち、けわしく切り立った奇型の山峰、青々とこんもり覆い茂っている松林、千姿万態の草花、水が珠玉のようにはね飛んで落下する瀑布……。王母娘々はそんな風光明媚な最高の山峰に住み、天宮の殿堂は荘厳で、花はからみ合い、楼亭が見え隠れし、道はつづら折りに折れ曲がっている文字通り仙山の佳境であった。

西王母は桃の木をこのうえなく愛し、数多く植られていた桃の花を観賞して娯（たの）しんでいた。そのほかよく桃の宴を設けた。そういうわけで三危山は上から下に至るまで桃で覆われていた。春になると一面桃の花が咲き乱れ、山は薄紅色の雲霞に覆い包まれる。秋になれば、仙桃が枝もたわわに実り、濃い香りが人を酔わせる。

三年に一回、西王母は蟠桃の宴を張り、天上各界の神仙を宴に招き、桃の味を賞味してもらう。また、五年に一回は下界の諸国の国王と王子を敦煌に招いて蟠桃宴を設け桃を吟味してもらう。招かれた国王、王子はその際、手ぶらでは来られないので、それぞれみな自国の特産物を携えて西王母に献上する。例えば伊吾国王のメロン、鄯善（中国漢魏の時代の西域の一国、西域南道諸国中、屈指の大国）国王のブドウ、于闐（今の新疆自治区の和闐）国王の美玉、大宛（中央アジアのシル川中流域フェルガナ盆地にある）国王の駿馬……などである。

ある年のことである。桃槐国王が初めて蟠桃宴に招待されて一種の瓜を献上した。その瓜は伊吾国王のメロンとは大いに異なり、大きくて丸く、皮は緑色で翡翠のようにみえ、つややかに輝いている。割ってみると、瓜の実は鮮血のように赤く、種子は墨のように黒い。食べてみると、汁水は蜜のように甘く、舌ざわりはさらさらしてさわやかで芳ばしい。喉ごしに、渇きを止め体熱の暑さを解くので、食べたあとは気分がはればれとしてさわやかになる。西王母は賞味してのち、しきりに絶賛し、特に桃槐国王に他の国王より五つ多い仙桃を贈った。桃槐国は三危山の西のはてにあったので、人々はその種の瓜を西瓜と呼んでいた。

ある日、月宮の嫦娥（月にいる美女）が三危山へ遊びにきた。西王母は自分の珍貴な宝をひけらかそうと西瓜を持ち出して接待した。嫦娥は食べると、急に気分が爽快になり、旅の疲れもすっかり消え去ってしまったので、西王母に向かってその味をほめたたえた。帰る際、

嫦娥は西王母に頼んで一握りの西瓜の種子をもらいうけ、月宮に持って帰って種付けしようとした。

さて、嫦娥は西王母に別れのあいさつをしてすぐに三危山を離れた。だが月宮に戻る途上で、ふいに人間世界へ遊びに行こうと思いつき、世俗の一婦人に変身し、田畑のあぜ道に出た。時は真夏。ものがみな燃え上がるような炎暑で息もつまりそうである。ふと目を横に向けると、一人の年老いた農民が子をつれて炎熱のなかで畑を耕しているのがみえた。息のつまりそうな灼熱に体は火照り、座っていても玉のような汗がぽとぽとと流れ出てくるのに、野良仕事はとてもできるものではなかった。農民の親子は仕事を止め木蔭に行き、携えてきた小さな水がめの水をごくごくと喉を鳴らしながらかわるがわる一気に飲みほした。腹は太鼓のようにふくれあがった。それでもこげつくような喉の渇きはとまらなかった。嫦娥は遠くから同情の気持ちをもってじっとこの悲惨なさまをみつめていた。

嫦娥は、真夏でも野良仕事をやらなければならない苦境にいる農民が西王母の西瓜を食べられたらどんなにかいいのに——と思った。そこで老農のところへ行って四方山話をしながら尋ねた。

「西瓜は渇きをすぐに解いてくれますよ、あなたはなぜ西瓜を植えないのですか」

「わしらは西瓜というもんがどんなものなのか知らないのじゃよ」

老農のこの言葉を聞き、嫦娥ははじめてここには西瓜がないことを知った。広寒宮（月の中

の宮殿）は全然暑くないし、それに自分は野良仕事をしないのに西瓜を植えて何になる？　それより西瓜の種を老農にあげて蒔かせた方がよいと思い、種を取り出して、

「これをみてごらんなさい。この種子が西瓜のタネなのです。大きくなって食べたら喉の渇きが解けます。それに元気が出て疲れもなおります」と言った。

老農は種を受けとって、

「あんた様のお名前を教えて下さいませんか、後日、西瓜が熟しましたらお礼に上がりますから」と言った。

嫦娥は笑いを顔に浮かべて、

「わたしは冷清店に住んでいて、白兎がいつもそばにつかえてくれています。一日は駄目ですが、十五日には来られますから……」と言い終わると、ぱっと姿を消してしまった。老農はそれを見て度肝を抜かし、両手に種子を捧げ持って長い間茫然と立っていた。婦人の言葉をよくかみしめ仔細に考え、漸く種子を送ってくれた婦人は月宮の嫦娥であることがわかった。谷雨（四月二十日か二十一日頃）前後に農民は瓜や豆の種子を蒔きつける。老農と子は季節にしたがって瓜の種子を蒔いた。朝晩気をつけてこまかに手入れした。土をくわですいて軟らかくし、除草をやり、肥料を施し、水を汲んできて土を湿らす。こうして初夏になると緑の皮の西瓜はガチョウの卵のように地面にいっぱいに満ちあふれ出てきた。土用になると、西瓜は熟した。夏の炎熱の土用になると、太陽の日照りで人間の体は焼き焦がれるほどになったが、老農一家は試しに西瓜を食べてみた。嫦娥

が言ったように甘くて芳ばしく、しかも喉の渇きをいやしてくれる。西瓜は食べきれないほどあったので、それを町へ売りに行き、こぼれ落ちるほど多くの銀貨を手に入れた。老農にしてみれば、西瓜はおいしい上に銭が入ってくる。まことに願ってもない結構なものである。それをみて西瓜を栽培する村人がどんどん増えてきたので、しまいにはこの地を瓜州と呼ぶようになった。

同時に、嫦娥の仙女が西瓜の種子を贈ってくれた故事はますます遠くに伝わっていった。みんなは嫦娥仙女に感謝するため、八月十五夜の月の最も丸い日に、家々が机に月餅と最も大きくて最も甘い西瓜を選び並べて供え、嫦娥に献上するようになった。この風俗は現在にまでずっと伝わっている。

ある年の八月十五夜、秋の空は高く晴れわたり、天候は熱くなく寒くもなく爽やかであった。月光はこうこうと照って、西王母も月を観賞にきた。観月亭まで来た時、山下を見おろすと、下界の人たちが長い机の上に香炉、燭台、供物を並べて嫦娥に熟しきった西瓜を敬い献じている様をみて嫉妬心を起こし、怒り心頭に発してしきりに罵倒し出した。

「あのちび嫦娥はよくもわたしの瓜の種を人間どもにあげて、奴らの気嫌を取ったわね。わたしを無視するとは！　まったくけしからぬことだわ」

西王母は思えば思うほど腹わたがにえ繰りかえり、すぐ風神を呼びつけ、すぐ一陣の大風を巻き起こして西瓜を一つ残さずどこかへ吹きとばしてしまうように命じた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com